

[語り始めた本人に学ぶ] 神山先生のお話を伺って・・・

修士課程1年

大澤 智恵子

今日の神山先生のお話は、初めて学習障害の方の生の声を聞く機会になりました。ご自分の事実をお話しになると言うことは、私が考える以上に、覚悟が必要で大変なことなのだと思います。ご自分を丸裸にするようなお話の内容に本当に驚き、頭が下がりました。ありがとうございました。今、学習障害と言う言葉自体が、とんでもない間違いなのだと確信できたのも先生の事実を伺えたからです。自分なりに認知していた学習障害は明らかに的はずれでした。

20年以上前のことですが、子供が小学校の時、偶然ですが、長女と次女のクラスに一人ずつ社会的困難を感じるお子さんがいらっしゃいました。当時は、学習障害などの枠組みを知ることもなく単に知的障害のお子さんだと勝手に思いこんでいました。

二人とも、新卒の先生（女性）でしたが、その後のクラスが全く違った形になったことを覚えていています。

長女の担任の先生は、自然に温かく、そのお子さんを見守り、それが当然であるように、クラスの子供達は、特別扱いするのではなく、でも当たり前とその子がいつも困らないように気にかけて見守っていました。遠足でも、運動会でも自然に「あっ〇〇ちゃんはいるか？あ～よかった。僕が〇〇ちゃんと一緒に行くよ」などなど。いつも自然に誰のことも気遣える素敵なクラスでした。その後、担任の先生が変わっても、クラスの雰囲気は全く変わらず卒業まで、その子もクラスの子もいつも笑顔でした。

次女のクラスは違いました。先生が、困っていることを何となく感じていました。今考えると、新人の先生は、そのお子さんとどのように向き合っているのかが分からず、その子にも、その気持ちが伝わっていたのか、いつも二人とも困った顔をしていました。すると、クラスの子も皆同じような雰囲気になっていきます。

悪循環が始まり、その子がいるからこのクラスは、問題ばかり起きる。その子に振り回されていると皆が感じ、それが態度に出るようになっていきました。子供たちのお互いを大事にする気持ちはなかなか育たず、他の子供達も落ち着きのない、まとまりのないクラスで卒業まで行ったように感じていました。かといって、自分に何かができるわけでもなく、対岸の火事状態の無責任な親でした。

先生の醸し出すノンバーバルコミュニケーションや姿勢が、クラス全体のお子さんに影響を与える事を感じていましたから、神山先生が、当事者であったからこそ、その子の気持ちがわかり、だからこそ、その子たちの特性を理解し、その特性を伸ばせる先生になられたことを伺い無言のナットクでした。

家へ帰り、つけたテレビから「異才発掘プロジェクト」という不登校などの子供たちからその子の特性を認め、その特性を育てると言うプロジェクトの放送が流れていました。先生が話された特異な脳ではなく得意な脳を認め大事に育てようと言うプロジェクトです。皆違っていいのに、その違いを大事にしななければいけないのに、その違いが理解されずに差別になっている現実。その得意の脳の違いが、言動・行動となって行く過程で誤解が生じます。でも、人の言動。行動の背景には、必ず、その人の思考や感情、理由があります。何故、そうするのか？なぜそう言うのか？そこから知ろうとすることで、その人を理解しようとするのが大事なのではないかと思います。

人に勝ち負けや優劣をつける必要はない。皆が輝いて助け合い、尊重しあって共に生きていければいい。そのとおりですよ。

学習障害と言う言葉は使いたくないです。神山先生が文字を読むことが苦手と言う特性を持ち、私が方向音痴という特性を持つのと実は変わりないはずなのです。でも、学習障害と言う障害者のレッテルを貼られてしまうのは、社会が理解していないからなんですね。障害は、その方が持つのではない。その方が持つ物は特性にすぎないのです。しかし、その特性で、一般的な普通な生活をしようとしたときに生活に障害をきたすから障害者と言われてしまいます。なら、環境や、システムや、物や、人の対応で障害者と言う言葉は無くなるはずなのです。

神山先生の特性を、周りの人間がもっと理解していいたら、神山先生は、心を傷つける事なく過ごしてきたでしょう。でも、周りの理解がないことにより、一番身近な家族からも辛い言葉を受け、学校でも、辛い思いを重ねてこられました。周りの人も知識がなく、その特性を理解できないことにより、苦しんできたのではないかと思います。特に家族は辛かったのではないのでしょうか？自分の子供を理解できない苦しみをどうやって誰が癒してくれるのでしょうか？今後、神山先生のように両方の方の心ねを聞いて頂ける方が増えたり、それがシステム化されたりすると、苦しんでいる方が救われると思います。

日本の教育は、皆、同じように優等生を作ろうとします。優等生の基準は何？人は皆違って当然で違っていいはずなのに。同じということが基準となっているのだから当然なのかもしれません。神山先生は、具体的に、自分の経験で辛い思いをされたときに、こう言ってもらえれば、こう対応してもらえれば、自分の思いは違ったと示して下さいました。ほんの少しの言葉の違い、対応の違いなのに、その後が大きく変わってしまうことは、私も自分の子供たちのクラスを見てきて感じていました。

社会が理解できない自分の事実を語ることは、とても勇気のいる事でなかなかできない行動のはずです。時間はかかると思いますが、当事者の方が声をだし、多くの学校の先生や親や一般の方々に示して下さいることにより、周りも理解し行動を変える事が自然にできる日が来るのではないのでしょうか？これからの日本の教育を考えて、幅広く多くの方に聞いていただきたい貴重なお話でした。本当に、ありがとうございました。